

「御国を受け継ぐ」

— 詩篇 37 篇の瞑想から —

はじめに

詩篇 37 篇には、何度も繰り返される「地を受け継ごう」というみことばがあります。読み進めることが難しいくらい、このみことばに惹かれるものを感じました。「地を受け継ぐ」ことが、どうしてそんなに何度も書かれているだろうか。

詩篇 37 篇は、知恵の詩篇と呼ばれており、励まされるみことばがたくさん書かれています。その「地」が、新約では「御国」と言い換えられていることを教えられた時、むしろびっくりすると同時に、そんな読み方をしてこなかったことに気づかされ、「御国」のイメージがむくむくと湧いてきました。

なぜ「地を受け継ぐ」ことが「御国を受け継ぐ」ことなのか？この祝福のみことばをミッドラーシュし、詩篇の語る「御国」をヘブル語で味わってみたいと思います。

1. テーマを構成する二つの語彙について

(1) 「受け継ぐ」の「ヤーラシュ」 יָרַשׁ の意味

「受け継ぐ」と訳された「ヤーラシュ」 יָרַשׁ は、旧約聖書中 233 回使われています。最も多く使われているのが申命記の 71 回、次がヨシュア記の 30 回です。所有する、占領する、相続する、勝ち取るという意味です。積極的に自分の意志で受け取る、受け継ぐという強いものを感じさせることばですが、自分が受け継ぐということは他のものを追い出すことでもあり、追い出すという意味で使われることもあります(出エジプト 34:24)。特にヨシュア記は「地を受け継ぐ」ことをテーマとしている書であり、神の約束に対する信仰の結果としてのカナンの獲得について書かれています。

「ヤーラシュ」 יָרַשׁ は、詩篇では 11 回使われていますが、そのうちの 4 回がこの 37 篇に使われていました。初出箇所は創世記 15 章 3 節で、神によって改名される前のアブラムが、自分の血を引く子供の与えられないことで神に「私の家の奴隷が、私の跡取りになるでしょう」と申し上げる場面です。そこで神は、明確に「ただあなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」と仰せられますが、このやりとりに使われています。これらのことから、「受け継ぐ」ということが、「相続」のことであるということがわかりました。

(2) 「地」の「エレッツ」 אֶרֶץ の意味

このことばは旧約聖書中 2505 回も使われていますが、創世記の 311 回に続いて使用頻度が多いのは、申命記 197 回、次いで詩篇 190 回とエゼキエル書 190 回です。初出の天地創造の記事では漠然とした「地」を表していますが、詩篇 37 篇では神がアブラハムに約束された「地」を示しています。はじめに神が約束されたものは、「乳と蜜の流れる地」(ハー・アーレツ ザーヴァト ハーラーヴ ウー・デヴァーシュ **הָאָרֶץ זָבַת חָלָב וּדְבַשׁ**) でした。それは、素晴らしい祝福の地です。牧草の豊かな、しかも蜂が蜜を吸うことのできる多くの花や樹木の生えている自然の豊かな地です。この豊かさが、神によって与えられる地である「御国」にも溢れているのだと考えられます。「乳と蜜の流れる地」カナンも、そして「天の御国」もどちらも、神が約束によって導き入れてくださる、信仰によってのみ受け取れる恵みの賜物、プレゼントです。

主の祈りにもあるように、「御国が来ますように」というのは、「御国が地に来る」ことを意味しており、同時に「御国」は「王国」(「マルフート」 **מְלָכּוּת**) を意味しています。

「Kingdom (「王国」または「御国)」という概念は、新約聖書の中でも最も重要な霊的概念であろう。英語やギリシア語では、「国」は絶対に動詞的な表現は取らない。なにか静的な領土と関連しているものである。しかし、ヘブライ語では「国」は能動的なもの、いわば行為なのである。それは人々の生活の中に支配している神なのである。神に統治される人々が神の国なのである。また、「国」は、奇跡や徴、不思議な業などを通して神の統治が示されることである。神の力が証明されるところ、神の「国」が存在する。」(「イエスはヘブライ語を話したか」ダヴィッド・ビヴィン著、ミルトス社、87 頁より引用)

「王国」(「マルフート」 **מְלָכּוּת**) は、神が治める国(地)、神が統治し、支配される国であり、御国の構成にはメシア(「マシーアッハ」 **מָשִׁיחַ**) と、主の民(「アム」 **עַם**) と、みおしえ(「トーラー」 **תּוֹרָה**) が不可欠です。したがって、その「王国」に住む民とは、どういう者たちであるかが重要です。

2. 「王国」(「マルフート」 **מְלָכּוּת**) に住む者たち

繰り返されるこの「～は地を受け継ごう」というフレーズで、「地を受け継ぐ」者がどのような者たちなのか、その特徴が詩篇 37 篇に記されています。「地」が御国である王国であるとすれば、この「地を受け継ぐ」者たちは、御国である王国に住む者たちであるといえます。その特徴は 4 つ説明されています。

(1) 9 節 「主を待ち望む者」(新改訳)、「主に望みをおく人」(新共同訳)

「待ち望む」(「カーヴァー」קָנָה)は、「信頼しながら、期待しながら、主を仰ぎ望みながら沈黙の中で主の救いを待ち望む」「神の約束の成就を集中しながら待つ姿勢」を意味します。この初出は創世記 1 章 9 節です。神が「天の下の水が一所に集まれ。」と言われているところです。「ここでの『集まれ』」は命令形ではなく、そうであるようにという意味の未完形受動態で使われています。」(「牧師の書齋」)主を待ち望むという姿勢は、「集中」ということにはあらわされていると考えられます。神の約束の成就を待つその姿勢、一心に集中して待ち望むことを神は喜んでくださることがわかります。

(2) 11 節 「貧しい人」(新改訳)、「柔和な人」(新共同訳)、「柔和な者」(口語訳)

「貧しい人」は「アーナーヴ」עָנָו で、初出箇所は民数記 12 章 3 節の、モーセの人となり、「地上のだれにもまさって非常に謙遜であった。」と紹介して、その柔和さ謙虚さに触れている箇所です。新共同訳はここを「柔和な人」と訳しています。イエシュアも、「柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐから。」(マタイ 5:5)と言われました。ただ、このように訳されてはいますが、ヘブル語の「アーナーヴ」עָנָו には、訳語から想像するような弱々しいイメージはありません。「それは当然の権利として主張できるにもかかわらず、神に対しても、人に対しても、自分のためには弁解しないという強い毅然とした態度を示す言葉です。つまり、ヘブル的な意味としての『柔和な人』とは、完全に神に従い、完全に信頼して、神にゆだねることのできる人のことです。」(「牧師の書齋」)

(3) 22 節 「主に祝福された者」(新改訳)、「神の祝福を受けた人」(新共同訳)

「祝福する」は「バーラフ」בָּרַךְ で、旧約聖書中 335 回使われており、詩篇では 75 回使われています。主語が「神」で相手が「人」である場合、または主語が「人」で「人」が相手である場合に「祝福する」と訳されるそうです。「人」から「神」に向かって使う時は「賛美する」となります。祝福の循環です。祝福は循環するのですが、神が祝福して

くださったことからすべてが始まっています。「バーラフ」 בָּרַחַף の初出は、創世記 1 章 22 節「神はそれらを祝福して仰せられた。」です。主に選ばれ、罪を赦され、贖われて神の子どもとされ、御国を受け継ぐ保証を与えられた者、光の子とされ、神の作品として神を証するもの・・・まず神が祝福してくださらなければ、御国に入ることができないのです。そして、神は祝福の神であり、私たちを祝福したいと願っておられることが創造の記事から明らかです。

(4) 29 節 「正しい者」(新改訳)、「主に従う人」(新共同訳)

「正しい」は「ツァッディーク」 צַדִּיק ですが、新共同訳が訳しているように、倫理的な正しさではなく、「主に従うこと」、つまり主との関係のことを示しており、キリストにあって義とされた者ということを示しています。初出は創世記 6 章 9 節の「ノアは正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。」です。ノアのどこが正しかったのか？それを創世記は「ノアは神とともに歩んだ。」と記しています。

このように、王国に住む者＝御国の民の 4 つの特徴が述べられているのですが、御国の概念の根幹は、神が人とともに住む「家」(「バイト」 בַּיִת) です。その最初の家が「エデンの園」であったのです。この「王国」「御国」も、神が人とともに住む「家」の概念と考えられます。「初めに、神が天と地を創造した。」という創世記 1 章 1 節は、ヘブル語で表記すれば בְּרֵאשִׁית で始まっているように、神のご計画のすべては、この「家」を象った「ベート」 בַּ の文字であらわされる「神の家」、「神の国」にかかっています。つまり神のご計画の目的は、「エデンの園」の回復だとも言えるのです。この回復のことを、パウロは「キリストにあって一つに集められる」(エペソ 1:10) と言っています。創世記 1 章 9 節で水が一所に集まることを望まれたように、神はすべてのものが一つとなることを望んでおられると言えるのです。

3. テーマに関連する二つの語彙について

(1) 「一つになること」－「エハーッド」 אֶחָד

「時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方にあつて、一つに集められるのです。この方にあつて私たちは御国

を受け継ぐ者ともなりました。」(エペソ 1 : 10、11)

エペソ人への手紙では、御国についての啓示が、この一つになること、一つに集められることとして各章でふれられています。

2 章では、キリストにあってすべてが一つに集められることについて、「二つのものを一つにし(14 節)・・・二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて(15 節)・・・両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるため(16 節)・・・このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づく(18 節)」

3 章においては「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となる(6 節)」

4 章では、「からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上であり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」(4~6 節)

さらに 5 章では、「『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。』この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさしているのです。」(31~32 節)

このように、エペソ各章は「エハーッド」**אֶחָד** のオンパレードです。いかに大切な奥義として語られているのか、ということですが、それはイエシュアが「わたしと父は一つです」(ヨハネの福音書 10 : 30)と言われたことに基づくものであり、すべてが一つに集められる御国の中に私たちが招かれているということでもあります。神と人、天と地、男と女、イスラエルと異邦人・・・いつかは一つとなるその時を待ちながら今の時を過ごしているとも言えるのではないのでしょうか。私たち異邦人が主においてイスラエルに接ぎ木されることによってこの祝福、御国を受け継ぐ者とされたその祝福はどんなに大きなものなのでしょうか。

また、「エハーッド」**אֶחָד** は、初出が創世記 1 章 5 節で、「第一日」と訳されています。つまり、第一、という意味もありますが、それは、ひとつ、唯一、ただ一つのこと、何よりも優先すべきこととしてすべてがくくられてしまう「ひとつ」という意味を持っている

ということです。イエシュアは、「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。」と教えられました。御国を、私たちがただ一つのこと、何よりも優先すべき一つのこととして求めることこそ、神が望んでおられることだとわかります。

(2) 神と人とがともに「住む」—「シャーハン」 שָׁחַן

このようにしてみると、神が求めておられること、神のご計画は、私たちがキリストによって一つに集められ御国を受け継ぐということに他なりません。なぜ、なんのために「地」＝「御国」を受け継ぐのでしょうか。詩篇 37 篇 29 節では、「地を受け継ごう」そして「いつまでも住みつこう」とあります。27 節では、「住みつくようにせよ」と命令されています。

神のご計画は、「神の家」です。神と人とがともに住む「家」を神は用意して待っていてくださるのです。「住む」の「シャーハン」 שָׁחַן は、創世記 3 章 24 節が初出で、神である主がアダムとエバをエデンの園から追い出されエデンの東に「住ませる」ように、エデンの東にいのちの木への道を守られるためにケルビムがおかれたという記事でした。神が人とともに住むために作ってくださったエデンの園を罪によって失った人間でしたが、神は再び、それを回復させ、人が神とともに住むために与えてくださろうとしているのです。

御国を受け継ぐということは、この神のプランの上に立っていることであり、旧約の時代からたくさんその時を待ち望む預言が語られています。ダビデもその一人であり、御国を待ち望んでそのただ一つのこと、第一のこと、「神とともに住む」ことを願っていることを詩篇の随所でうたっています。

「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを」 (詩篇 27 : 4)

この「住む」は、とどまるという意味の「ヤーシャヴ」 יָשָׁב ですが、主との親密な交わりを求めていることについてはこちらのほうがいっそう深い意味とも言えます。このような誓い・願いをもって神をほめたたえたダビデを、神はことのほか愛されました。このような霊性を神がどれほど願っておられるかがわかります。

神がわたしたちとともに住むことを願われて御国を受け継ぐ者としてくださったこと、

このことをパウロは「天にあるすべての霊的祝福」（エペソ 1 : 3）とっています。

おわりに

「私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。あなたもあなたの子孫も生き、あなたの神を愛し、御声に聞き従い、主にすがるためだ。確かに主はあなたのいのちであり、あなたは主が、あなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓われた地で、長く生きて住む。」（申命記 30 : 19、20）

詩篇 37 篇においては、「主に信頼して地に住む」ことをはじめ、私たちがどのように歩んでいくべきであるかの知恵が語られているわけですが、「悪者」の存在、「悪を行う者」の行く末が「断ち切られる」のだとこれも繰り返し示されています。本物の知恵は、目の前におかれた祝福とのろいのうちから、間違えないでいのちの道を選びとることでしょうか。

「あなたはいのちを選びなさい」

これは、神の、時には優しく時には厳しく、私たちを見守ってくださる「声」です。御国を受け継ぐその時、私たちはいつもその神の声を聴きつつ過ごすことができるのです。この祝福を、多くの人々に告げ知らせることができますように祈りつつ

2017年6月26日 松原小百合